

南の島の子どもたち(5)

子ども心のこだわり、とらわれ

浅野 恵美子

二年間の障害児教育を受けて卒園し、今ではもう小学
二年生になっているフミアキのことをふりかえり、実践
記録としてまとめる作業をしてきた時、彼が一貫して主
張していたことが見えてきた。保母たちは、彼の思いを
もっと受け止めてあげればよかったのでは……との小さ
い後悔もおこったようだ。

巡回相談員としてかかわってきた私も又、彼の「こだ
わり」の持つ積極的な意味について改めて考えさせられ
た。彼は、はっきりと様々な形で「オレワイサレテン
カルベキダ。オレノイウコトヲキケ」と主張していたと
思う。そして、彼は、何と小学校に入ってもにたような
主張を続けていたのであった。

一人ぼっちで遊んでいたというファミアキ

彼は三歳で保育園に入園してきた。頭が大きくて体が細くて、保母にびったり寄り添ってニコニコしていた彼と始めて会った時、食が細いとか言葉がでない（入園当初、「オイシ」等の一語文程度）とか言われても対人関係良好、自己表現良好であって障害という印象からは遠いのであった。

彼は、自己の安全基地の確保ということでは保母と良く繋がって不安はなかったのですが、時々外から訪れる私に特別な関心を示すことはほとんどなかった。保母は彼の心がよくつかめていて、彼の真似を大変上手にやってみせる程であった。

彼の生育歴に目を通すと、母親が妊娠中、貧血ぎみであったこと、仮死出産で生まれたこと、けいれんがあったこと、乳のすいつきは強かったこと、言葉の話しはじめは一歳、体が弱く病院通いが多かったこと、白衣を着た人を恐れたこと等がしるされている。

彼が三歳になる以前は、母親も病弱で寝こむことがあ

り、本人は第一子で、友達もいなくて一人で遊んでいることが多かったらしい。それを見た保健婦が心配して、積極的な相談にのり、「ことばの教室」を紹介したのが障害児保育を受けるきっかけとなった。主訴は、「言葉が遅い、落着きがない」というものであった。

受けをねらう行動

入所した四月の頃の彼は、生活面の自立は良くできていて、排尿は、ほとんど失敗することはなく、どこの部屋のトイレでも使用し、パンツ・ズボンは自分で着脱できていた。問題は食の細さと偏食であったが、一年の間にすっかり改善されていた。

集団との関係では、「他の子どもがブランコに乗っていると自分も乗り込む」とか「保母が外にいる皆に入室を促すと他児の流れにそって一緒に入ってくる」等、保母の指示にもしたが、皆といることにも抵抗はない。むしろ、初めからまわりの受けをねらっているんなポーズを取るなど、人に対しても積極的であった。

この受けをねらう行動は、二年目になっても『「チンチン、アッ!』』といって他の子どもを笑わせている」等続いていた。彼は、何度も何度も同じことをしては友達を笑わせていたようだ。

この「受けをねらう行動」に彼らしきがあったし、発達の意味もあったと思う。周りの人への信頼感情、周りの人を自分の支持者にしたい思い、みんなの中の自分（自我）をはっきりさせようとする動きであったと思われる。そこには、自己と他者の分化があった。しかし、他者は、フミアキにとって自分の補助者、自己の一部としての他者であって、いわゆる「他者」ではなかった。周りは自分を支持し、支える存在でなければならなかったのである。そんな確信を彼は、しっかりと一貫して主張していたらしいのだ。

補助者（大人）の枠の中でのみ従順に生きていくのならそれでもよかったが、自我が芽生え出すとそれがだだこねになっていった。自分の思い通りに事が運ばないと彼は、怒り、物を投げたり、ひっくりかえったりを繰り返した。

返した。フミアキが家庭でも保育園でもしばしばおこしたパニックは、「みえない壁」となって彼を苦しめたが彼も周りもその壁を取り除くことができなかった。

その壁は、自分の味方だけを存在させようとした無理であった。逆にいえば彼が自分の補助自我を切望していたということだ。だから、もっと彼の真意をくみとってあげればよかったのではとの思いが保母におこったのである。しかし、いつまでも、そこにこだわらず、そこのみ留まろうとした彼に、ナルシストを越えられないもどかしさがあった。

フミアキ式着衣法

保育園での彼のエピソードの例を保育一年目の担当保母の手記から紹介しよう。

「初めのうちは、脱いだら着ようとせず保母に促されていたが、三、四か月で上着の脱ぎ着まで上手にできるようになった。ユニークな思い出がある。パジャマの上着のことだ。前ボタンなので他の友達とはスムーズに袖を

通しているのだが、彼にはそれができなかった。しかし、彼は彼なりにおもしろい方法を発見した。床に上着を着られる状態にして広げ、距離をはかりながら、上着に自分の体をたおして合わせていた。他の子は思いつかないことを考え出した彼は、時々そうやって着ていた。

そのようにしばらくは自分から喜んで着替えるようになっていたが、そのうちに、パンツ、ズボンさえも自分ではこうとせず保母にやってもらおうとする態度が出てきた。『頑張ってみようよ。』と励まして少しずつ介助したりしていたのだが、自我の芽生えと共にだんだん難しくなり「やりたくない！」とひっくりかえったり、クラスの保母が助けてくれないとわかると隣のクラス、それでも駄目なら遠く零、一歳のクラスへと遠征していった。

職員間では、彼の依頼心が強すぎることを話し合い、手伝ってやらないことを打ち合わせてあったので、終いには、クラスに戻ってしぶしぶ着替えたり、床につつ伏して泣いて鼻水で顔をクシャクシャにしていたことがとても印象深い。『着替えようね。』と言うと『ウウン！』と

必ず拒否。特にボタン掛けは面倒がり、『オイデー、オイデー』と保母を呼んでいた。指先の力と器用さが足りなかったせいもあるだろう。何にしても着脱の面では、依頼心の強さに一年間、手をやいた。』

彼はストリートにどんどん成長していくのには、何か不足していたのであった。彼のこの状態は、おそらく体調とも家庭生活とも関連していたと思う。彼は体力がなく、病氣しやすかった上に、家庭生活も父親の仕事が順調でなく、経済的な問題も抱えていたようであったからである。

音楽が好きて記憶力抜群

保育二年目。フミアキ四歳。担任が新しくなった。彼は、新しい三人の担任（クラス担任二名、障害児加配保母一名）に違和感のみせなかったが、旧の担任の一歳児クラスへ行き、好きなラジカセを聞くことが多かったようだ。彼はラジカセが大好きで、それにのみ執着して他に遊びが広がらないので、三歳時代は禁止していた。

新しい担任たちは、彼を部屋に呼び戻す方策としてラジカセをかけたという。予想どおり彼は自分のクラスの部屋にもどってくれたそうだ。担当した保母は、彼の特徴について次のように書いている。

「カセットをまきもどしすると、じっと見ながら指で回る動作をしている事もよく見られ、機械へすぐ興味を示していることが伺えた。その他興味を示していた事は、車輪の様子を見たり、横倒しにして車輪を手でまわし、動きをじっと見たりして遊ぶことだった。それに夢中になったかと思つた途端、又室内でカセットを聞いたり、自分でセットしてみたり、トイレの水タンクの中に触れたりして遊び出していた。注意してもわけがわからず、水タンクをこわしてしまったことも度々であった。遊びの発展性がない為、一つの遊びがいつまでも繰り返されている状態なので、いろいろな遊びが楽しめるように、時々パターンを変えていくようにしたが、特にカセットに関してはなかなかで、曲がなるとすぐそれに向かうというパターンがぬけきれなかった。」

このように、彼の外界とのかかわりはユニークであった。気分が変化しやすい（泣いても直ぐ笑うことができた）、カセットのまきもどしには自分も指をまわしながらみる（その物になってみている）、音には自動的と思える程のれる（音の方が主人？）、執着心が強い等である。彼のメカ好きは父親の影響であった。彼は、音楽に合わせて歌ったり、踊ったりは大得意であり、動作も即座に覚えた。運動会のフォークダンスは友達をリードする程上手であったようだ。ふりつけ等は、保母自身が教えて忘れてしまつても彼がちゃんと覚えていてくれたという。しかし、コンピューター人間のように一度覚えてしまったこととの関係が強くて、場面に応じて行動を変えることができなかったようだ。「登園—設定保育—食事—歯磨—着脱—午睡—おやつ—隆園の流れを変えることをこばみ、例えば時間がなくて歯みがきをカットしようとする、どうしてもやるんだといはいはり、床におおむけになって泣いてねばるといった……」と保母は書いている。ここにも、ファミアキのぶつかる壁があったので

ある。自分の体験の意味を捉える力が弱かったのかも知れない。人だけでなく、物も彼の期待する秩序を持っていないければならないのであった。

このような彼の行動は、自分の思いとの関係が強い自我の段階であるのだが、言葉的思考の発達以前の子どもの特性でもあったろう。関係体験は、プリントされるかのように彼の心にぎざみこまれたのである。

それでも彼は卒園近い頃には、大変ききわけが良くなっていた。相変らず音楽が鳴ると、すぐに部屋からぬけどだす彼に保母は、「フミアキはバーツ、みんなはマール」と言葉と動作でしつこく言うと、周りのお友達をみまわし考える仕種をして、部屋にとどまれるようになれたようだ。言葉も「アーキノクツナイ」という三語文も話すようになっていた。

小学生になって

フミアキは、幼稚園を経て小学一年生になっていた。

保母たちがフミアキの担任を訪ねて、彼の学校での様子



▲どの子どもいっしょに（H保育所にて）

を聞いてきてくれた。彼は、普通学級にいて、担任の丁寧な観察、指導を受けていたのであった。先生が報告する彼の状況が保育園時代と大変そっくりなことには驚かざるをえなかった。母親から聞いたことでも愉快だと思ふのは、母親が小学校に上がる時、校長室へ出向き挨拶をしたので、本人は毎朝、学校へ来ると「校長センセイ、オハヨウゴザイマス。」と丁寧に挨拶するのが常であるということだ。校長は、大変喜び、ことのほかかわいがっているそうである。

担任の報告によると、

(1)、彼は、やはり、音楽が聞こえてくると教室からぬけだすが、他クラスの先生は受け入れている。三学期になつてから恥ずかしいのかあまり行かなくなった。

(2)、ある程度対話はできるが、長い文になるとはつきりしないところがある。

(3)、発表したい気持ちが強いので言わせると関係ない事を言ったりする。他の子が「ちがうよ」というとイライラして学習用具を投げつけたりの動作がみられた。担任

がパニックと手をたたいたら投げないようになったが、ぶるぶるふるえだしすごく緊張していた。物は投げなくなったが、わめきちらし授業が中断されることがある。

(4)、算数は一〇までの計算問題はほとんど出来、百点をとることもあった。指を使って計算する。

(5)、国語の時間は、仲良し学級へ行かせたら喜んで行きもどつてくる。

おおまかには以上である。この報告に触れて、私は「恥ずかしい」がわかりかけてきていること、先生にたかかれて緊張したことは、凄い進歩だと思つた。彼の心に「他者」がすみはじめているからである。ただこね、パニックはおさまるかも知れないと思つた。

母親に二年生になつていゝ彼の様子を訪ねてみた。彼は、仲良し学級に入り、これまでよりものびのびと勉強も進んでいるとのことだ。そして、何と予想どおり、彼のパニックはおさまり、落ち着いているとのことであった。四年近くかかつて「壁」が取れたのである。

個性をみる目を

フミアキのことはわからないことの方が多い。それにここではほんの少し紹介したにすぎない。親も保母も先生も精一杯の援助をしてきた。だから、大きく成長してくれたが、彼の障害もはっきりしてきた。彼は変化し続けている状況に受け応える力が弱いようだ。理由はわからないが、おそらく、幼少期の何処かで、彼の脳に堅さが生じたのではないかと今は思える。

私は、自分も又、フミアキと同様に、違う内容ではあるが、世界に対して一貫した期待を抱き続け、何度も見えない壁にぶつかってきた事を思い出した。

大人も、彼と同じように、非言語のこだわりを持ち、壁にぶつかっている場合が多いと思う。それは、大人の中に生きている内なる子ども心のメッセージなのではないか。こうして、フミアキによって大人にとっての「子ども心のとらわれ」をよみとる視野がひらけてきたのである。

フミアキが一貫した主張ができたことは幸いなことで

あった。障害児を単に訓練の対象にしてはいけない。彼らの不足を補ってやりながら、彼らの個性を活かしていくことが大切である。今のフミアキならば、今の時代ならば、個性派の人物として周りに貢献できる何かが育つ余地は大いにあると思うのである。

(沖縄キリスト教短期大学)

